

時代的背景とプラトーンのイデア論

鹿野 治 助

プラトーンの最も嫌つたものは體系を作ることであつたと云ふ人もゐる。一つの建設をなしては又新たに出發し、未だ完成を見ざるに更に始めるといふのが彼のやり方であり、彼は永遠に新らしく出發したかの如くである。従つて彼の思想を体系的に把握するといふことは最も困難なことで、恰も箱の一方をたゞけば他方があき、他方をたゞけば又他の一方があく様なものである。そして又プラトーン哲學解釋の相違は色々な理由にも依るが、大きな理由の一つは彼の思想の何れの部分に重きを置くか、初期か中期か又は後期か、又後期の何れの部分にか、といふ様なことに基くと思はれる。併し今我々は彼の體系に對する新見解を提言しようとするのではない。彼に先立つ時代の歴史的社會的情勢を瞥見し、ソクラテース、プラトーンが如何に現出したか、そしてソクラテースとプラトーンとの關係相違よりしてプラトーンのイデア論の成立意義をさぐつて見ようと思ふのである。従てこゝに述べ

られる彼のイデア論は彼の轉向前のイデア論であつて、やがてそれは彼の轉向後の思想究明に對する一準備としての素描のつもりなのである。併しその様なこともプラトーンに對する一つの把握なる限り、彼の具體的な思想の多くの方面を棄てねばならず、從て又一面的であることは豫め斷らねばならぬ。

—

時代的背景と云へば嚴密には彼に先立てる、又同時代の哲學思想は無論のこと、政治、道德、文藝、社會、經濟、法律、數學、その他の科學など總ての方面から見るのが當然であらう。又あらゆるものを取り入れ、あらゆるものを論じたと思はるゝプラトーンにはそれも必要であらうし、そして現にシュテンツェルやテブリッツなどはギリシア數學の深き研究などからしてプラトーンに於ける哲學と數學の密接な關係を明かにし、引いてはプラトーン哲學の新解釋をなしてゐるわけであるが、今我々は時代的背景と云つても社會的情勢といふ様な一部分に限つて出發しようと思ふ。蓋し最初政治家たらんとしたとは、プラトーン自らが云つてゐるところであつて、彼は直接には歴史的、社會的な問題から出發した様であり、その様な雰圍氣の中に育ち、その様なものに對する關心が又彼の哲學への出發點と云つた様なものだからである。そし

て同時に又彼の哲學に於ては、數學、天文學等の諸々のものは政治の中に統一せられ、又教育、法律、宗教その他のものも國家と不可分離のものであつて、云はゞ政治とか社會問題が總しめくゝりとさえ思へるからである。

さてフイールド¹に依ると古代に於ては思想と行動の單位は家族であつて個人は個人としての存在性を持たなかつた。財産とか法律とか宗教とか道德的責任などは全體として家族にかゝはるものであつた。併し定住して久しくなれば家族共同體は擴大して種族的共同體となる。又アドコック²に依ると、この様な同族の時代に於ては同族的團體内の各家族はそれ／＼家長を持ち、それから家長の中の一人は首領或は王として、或は同族のものを戦争へ導いたり、或は國家の事務を掌り、更に經驗に富める老人を顧問としたものであつた。かくしてギリシアにはいくつかの村が成立し、同一祖先の同胞たることを想像して宗教的に結合し、經濟的にも戦争にも相互に扶助し合つたのである。併しこれらの村々は北方からの移住するものあるに至つて、生存上の必要から所謂都市を形成せねばならなかつた。かくて或は種々なる民族も相合して都市を形づくることゝなつたのである。ところで問題の起るのはこの都市形成以後なのである。即ち以前の遊牧の民から定住した許りの同族共

同體即ち村落共同體の場合には各民族は抽籤に依つて幾年目か毎に土地は分たれたものであつたが、都市を形成すると共に血縁は次第に薄くなり、土地私有の風習も不知不識のうちに形づくられることゝなつた。そして祖先墳墓の地を去り兼ねる者を除いては悉く都市へ集中しその土地をば被征服民族や捕虜である農奴や日雇人に委せ己れ自らは地主となり、やがて又貴族となるに至るのである。他方、地方に残れる者も最初は政治的差別をつけられなかつたが、後には參政權を奪はれたり、總てに不利となり、ついで經濟上の變化と共に苦境に陥つて、借財に又重税に惱み、或は一家を擧げて奴隸となり或は虐待に堪えずして田園を去り、農村を後にして都へ走る者も多くなつた。又紀元前八世紀頃からギリシアでは商工業の勃興と共に原料に加工して都市間の交易をやつたり、それと共に殖民を行つたり、或は又原住民を征服してそれを農奴とすることなどがなされた。而して貴族は此等の活動のうちに有利な位置を占め又政權を獨占したらしい。併しそれら農業から商工業への轉換の時に當つて他方民衆も漸次勢力を得ることゝなつた。即ち従來は家畜や土地に依つて富を測つたのであつたが、商工業の發達や貨幣の使用と共に民衆も富を貯へることゝなる。而して又富は同時に勢力の地盤をなすに至り、かくて富の前には貴

族も家柄もその値打を失つて没落の道を通ることとなる。正にその道を通つた厭世詩人テオグニスは『嘗て貴かつた人々が今は賤しい、さうして賤しかつた人々がそれに代つて貴い』と嘆いてゐる。こゝに勢力を得て來た民衆が從來の貴族との間に争を構成することも當然で民衆は貴族へ成文法や政權上の平等を要求した。併し專制横暴、又利己的な貴族は民衆に對して何等の誠意をも示さなかつたらしい。かくて民衆は激昂し、やがて農民や民衆と地主や貴族との關係對立は穩かならぬものがあつたと云はれてゐる。この時この内亂を處理すべく最高の權力を委されたものはソロンである。ブルタルコス4のソロン傳4を見るに當時アテネは色々の黨派に分れ、山地の住民は民衆政治を、平地の住民は貴族政治を、海濱の住民はその混合政治を望み、貧富の不和も亦その頂點に達してゐた。貧者は總てを富者に負うてゐる有様で、彼等は富者のために土地を耕し、その收穫の六分の一をその報酬として貰ふ丈であり、かくて彼等貧者は身を抵當とせられ何時捕へられて國內の奴隸とされ、或は外國へ賣られるかも知らぬ様であつた。又止むを得ず子供を賣り或は都から逃れる様な有様であつた。併し大部分の者や強き者は、互に團結して勵し合ひ、信賴出來る者を選んで首領とし、かくて債務のために差押へられたる者をば自由にし、

土地を新たに分配し、法律を根本的に變へんことを要求したといふことである。ソロオンは正にこの和解者として貧富兩階級から選舉されたのである。彼の業績の多くを述べることは今は必要でないが、彼は所謂⁵徳政を施して負債を取消し、負債に依る身體の束縛を禁止し、現に奴隸となれるものは、これを舊にもどし、海外に賣られたものを自由な身となし、又重税を禁じた。更に又彼は官職を與へる關係から財産に依つて新らしく等級をつくつた。併し彼が人々の特にも賛成を博したものは、遺言に關することである。従來は人死して子なければ財産は同族共通のものとなつたのであるが、ソロオンの法に依つて遺言で自分の欲する人に與ふことが出来る様になつた。そこでブルタルコスは『それに依つて彼は血縁よりも友愛を勝れたものとし、愛を血縁のかゝはりの上に置いたのであつて、財をば初めてその所有者の自由なる財としたのである』と云つてゐる。こゝに於て人は始めて個人として、血縁のつながりなる小團體から離れ直接國家の中に自己を見出し、かくて遂には個人としたとも云へるであらう。以上のことに依つて民衆は幾分心を緩和されたらしいが『平等は戦をなさず』とのソロオンの語に多くを期待し、土地の再分配を願つた

貧者達はその望の裏切られたる爲に、又富者はその富を失へるために不平の聲は絶えなかつた。そこでソローンが詩作をなしながら旅に出たのであると云はれてゐる。又、アリストテレースに依ると第二の民衆指導者であつた僭主ペイストラトスは田園を棄て、都へ集中する青年達をくひ止めんがために、或は税を減じたり税を免じて閑地を耕作させたり、地方に裁判所を設けたり民情を自ら視察したり、地方と都市の政權上の差別を去らしめんとしてゐる。

ところで民衆一般が勢力を得て來たこと、政治家の救民政策とは相俟つて、やがて民衆の横暴なる結果を招くに至つた。我々はペリクレースの施政を述べて之を見て見よう。フルタルコス¹⁰に依ると彼は元來民主主義者ではなかつたが社會の情勢上、その本意を翻して貧民の友となり富者や貴族の味方とはならなかつた。又ブルタルコスが或史家の言として傳ふるところに依ると彼は土地を分配し、觀劇の料金を與へ又俸給を給したと云ふことである。併しこれはペリクレースが¹¹煽動政治家キモーンの名望に對抗せんがために民衆に身を屈し人望を得ん爲の手段であつたと云はれてゐる。即ちキモーンは貧しきアテナイ人に日々食を給し、老人に衣服を與へ、又自分の領地からは、各人が果實を思ふ儘取り得る様に垣根を除き去つた。

ペリクレースはこの様な煽動的な活動に破れ、或者の言を用ひて公金を分配することとなり、觀劇料や法廷への出頭費を給し、或は他の給金や好意を以て民衆を惹きつけたのだと云はれてゐる。併し又役人に給金や觀劇料や民會への日當を與へたといふことは貧民である民衆を政治へ參與せしめた爲の當然なる處置であつたと云はれてゐる。併し理由はキモーンへの對抗にせよ、或は民衆を政治へ參與せしめた爲であるにせよ、以上の如き度を越えた民衆の優遇は民衆をして増長せしめ奢侈傲慢たらしむることとなつた。そこでブルタルコスは或史家が『彼に依つて始めて惡習慣が出來、以前には人は勤儉にして勞働好きであつたのにペリクレース時代の政策に依つて奢侈放縱になつた』¹³と云へるを傳へてゐる。その他ペリクレースは土木事業を起して失業者を救つたり、植民をすゝめて一には貧民を救ひ二には無職の徒の暴動化を防いだと云はれてゐる。併し以上のやり方でも恩恵に浴せざるは獨り奴隸許りでは無かつたらしいが、それでも以前に比すれば民衆は大した相違である。そしてこれがきつかけになつて民衆は適度を失ひ昔日の素朴な生活を忘れ贅澤にして傲慢所謂ヒュプリスなる民衆と化し、殊に煽動政治家の影響に依つて次第に横暴を極め、遂には民衆政治の實現に依つて公金をも自由にするに至つた。か

くて民衆は從來の貴族や地主の政治的權力を奪ひ、更に財産を奪掠し、政治的にも經濟的にも豊かな生活を送ることゝなつて彼等の年來の宿望を達したわけである。併しこのことは他方貴族や地主の生活の逆轉を物語るものである。彼等は民衆に財力も權力も奪はれ、或は將に奪はれんとしてゐる。而も國家に何彼と云つては金品を取りあげられ、戦々競々として心を休めることが出來ない。その憐れむべき生活物を物語るものとして我々はその一例をクセノブォーンのシュンポシオン第四章二九から次の文を擧げることが出来る。カルミデースが貧乏を誇りとする理由を聞かれた時彼は次の如く語つてゐる。『恐れてゐるよりも勇ましくあることがより善く、又奴隸であるよりも自由であることが、諂ふよりも、諂らはれることが、祖國から信用されることが信用されないよりも善いといふことは何人も意見を一にする所ではないか。』ところで私がこの國で富んでゐた時は先づ誰かゝ家を破り財を取りはせぬか、そして私に害を與へはせぬかと恐れてゐた。それからヒュコパンテスに媚ねばならなかつた。私が彼等に害を與へるよりも彼等から受けることを知つてゐたからである。かてゝ加へて國家からは常に費用を支辨する様に命せられ旅することは決して許されなかつた。然るに今は國外の財産を失ひ國內での收入

をとらず家財道具を賣り拂つて以來私は枕を高うして氣持よく眠られる。國家には信用され最早威かされずして却つてもう他人を威かす身分である。そして今は自由人として任意に外國にも郷里にも生活出来る。今は富者は私の前では席を立ち途上では道を譲らねばならない。嘗て私は見た所奴隸であつたのに今は支配者になぞらへられる。嘗て私は民衆に賦課金を拂はねばならなかつたのに今は國家が金を給して私を養つて呉れる。私が富んでゐた時には私がソークラテースと交際するのを人は非難したものであるが、今は貧乏して以來何人も意としない。又私が澤山所有してゐる時には何時も國家や偶然に依つて何かを取り去られた。だが今は何も取り去られぬ(私は何も持つてゐないから)だが何時も何かを貰へるといふ希望があるのである。』以て當時の富者階級のみじめさと民衆の傲慢暴戾とを窺ひ得るであらう。又アルキビアデースも民衆に依つてその財を失つたとソークラテースは云つてゐる。かゝる傲慢暴戾はたゞに經濟的な窮迫からのみでなく嘗て貴族や富者から受けた傲慢と侮辱の報復でもあつたのである。蓋しプラトーンの語る所にして事實を含むものとすれば、嘗て富者の治下に於ては富者たる僅少の者を除いては悉く乞食であり、治者は競ふて金を以て倉庫を充し、社會的地位も財の大小

に標準を置き、貧者を搾る以外は一顧もせず、精神的にも肉體的にも無爲徒食、たゞただ贅澤三昧に耽つてゐたからである。併し又貴族や嘗ての富者達もたゞ唯々としてゐたのではない。恰もこの頃はペロポネソスの戦争(紀前四三〇—紀前四〇三)に於てアテナイの海軍がスパルタの陸軍に破れた時で貴族に於てはクテリアースが首領となつてゐた。彼は民主政治では統一なくして戦争に無力なるを主張し、國外に追放せられたる貴族の錚々たる者共を糾合して民主黨と戦つたのである。併し戦は失敗に終つた。

さて以上の様な情勢であるとするならば識者の仕事は以前とは寧ろ逆に民衆に味方することではない。却つて反動的でなければならなかつた。喜劇詩人アリストプアネースなどは反動的保守黨の一人であつたらしい。彼は農民が田園を棄て、都へ走るのを防がんとして古代の田園生活の美を稱へて復古をはかり或は進歩的な新人や制度を揶揄したり皮肉つてゐるのは有名である。又「雲」の中にソークラテースを戲畫化したり「女議會」の中に新らしき女を嘲笑したことも有名である。ペールマンに依るに「女議會」では共産國の女議長ブラクサゴラスが登場して演説し女に政權を委ねるべきを主張し、成功して女天下を實現するのであるが、この共産國

では先づ畑や金や他の一切のものを共産とし、その共産財に依つて女が男を養ひ、着せ、又支配する。この國では一切の食物は共有にして享樂あつて苦勞がない。田園は奴隸に委せ、人々の主たる仕事は宴會のために着飾ることのみである。而も自由と平等の化身であるこのブラクサゴラスの樂天的なことには、奴隸が人間であることを忘れてゐる。更に樂天的なことにはこの國では一切が焼肉も酒も戀も共有なるが故に、嫉妬も悪意も喧嘩も争も又反抗も不可能で貧困は永遠に除去され盗人もなければ掠奪も詐欺もこの世から消滅すると云ふのである。これらのことはアリストブアネースの極端化した諷刺であらうがさうした考が又民衆の中に、又女の中にあつたのであらう。併しアリストブアネースの本領は保守的で太古へ返すことにあつたらしい。又ヘーラクレイトスの如きも保守黨の一人であつたらしい。彼は民衆を衆愚と侮り、友人ヘルモドーロスが追放された時には最賢人を失つたと云ひ又彼が民衆に依つて、立法のため出廬を乞はれた時には時既に遅きを難じてゐる。かくて彼は寺へ隱遁し、子供達と遊戯をしてゐる。そして訪ねて來たエブエソス人に對して『諸君と市民生活をするよりも遊戯をやる方がましではないか』¹⁵とさえ云つてゐる。ヘーラクレイトスやアリストブアネースは貴族であつたから彼

等の攻撃は門閥に基くと云へなくもなからう。併し貧民階級から身を起したソークラテースも亦自分の屬するときえ思はるゝ民衆へ最も辛辣な言葉を向けてゐる。例へば「辯明」の中に自分を亡すものはアニユトスやメレイトスではない、諸君民衆である。といふのはその民衆に依つて今迄どれ程多くの人が殺され又これから殺されるであらうか分らぬからであると云つてゐる。又クリトーン篇に於ける噂なるものゝ批評でも分る様に彼に云はせると民衆は所謂衆愚で僅少の人のみ聽くに價する賢者なのである。さういふ僅少の併し深く信ずる人にとつては、民衆の輿論も噂も恐るゝに足らぬが併し同時にその民衆の力は恐るべきものであつた。それは盲目でありながら時代を決定して行くからである。さればプラトーンもポリテイア篇に多數者こそ本當のソ、プイスタイであつて、そして如何に青年子弟を墮落させるかを述べてゐる。(四九二B) プラトーンが個人の魂の五つの型、並びにそれと平行的に五つの國體の性質及びその移り行きを述べる時、彼の叙述は彼の理論や想像であつて必ずしも歴史的事實と見ることは出来ぬかも知れないが、併しその間尙當時の實際的事實を窺ふことが出来る。彼に依れば富者階級と貧者階級とが對立して後者が勝利を得、前者を殺し或は追放して國家を支配すると共に民衆政治は始ま

るのである。この國に於てはあらゆる種類の人間が発生し、或人には五色の着物の如く美しく見える。この國では人は支配の能力あるも支配者にならねばならぬ義務はなく、又欲せざれば支配されなくとも差支なく、又戦争に行かねばならぬことも、平和で暮さねばならぬこともない。法に依つて妨げられることも又法に従はなければならぬこともない。従て一見頗る神的にして快適、寡大にして鷹揚であり、プラトーンの國家建設に於て重せられる様な窮屈な原理は全く輕視される。人はどんな事をしても差支ないのである。(五五七A) 又彼に依れば國家とは雖も國家なく全く無政府雜然たるものなのである。従て個人は行き當りばつたりの快に従つたり、酒を飲み笛を吹き、又水許り飲んで瘦せ衰へ、思ひ出しては體操をやり、哲學をして見たり、或は政治に携つて氣儘勝手なことをやつて見たり、云つて見たり、又軍人が羨しくなれば軍人となり、又商人となつたりして何等の方針も秩序もない有様なのである。更に又プラトーンは云ふ、『民衆政體に於ては何のことはない諺に云ふ通りに犬も馬も驢馬も彼等の女主人の如くなり、全く自由に而も高慢に進むのを常とし、道で出逢つた者が道を譲らなければ飛びかゝり、その他總てに於てもかくの如くに自由である。』と。かくて彼は民衆に依る政權把握をば有劍無劍の蜂のガヤガ

ヤ騒ぐのになぞらへてさえる。

以上は大體民衆の情勢であるが我々は同時に知識階級の有様を忘れることは出来ぬ。ソークラテース、プラトーンの、殊にもその哲學的方面はこの知識階級の態度と深い關係があるからである。ところでこの階級を代表する者は云ふ迄もなくソピステース達である。併し知識階級がソピステース達としての特色を持つ様になつたのはソークラテースの少し前からであつて、それ以前は普通の知識階級であり宇宙自然の研究をやる有閑階級であつた。併しこれが世の推移と共に所謂ソピステースとなつたのである。無論これは多岐多彩的であるがその特色を見るならば、第一經濟上の切迫は安閑として今迄の様なおしやべりすることを許さなくなつた。ソピステース達が或は諸都市を遍歴し、或は定住し、知識教授の報酬として金品を要求し生活の資に供したのはそれに基くのである。學問の教授に依つて生活を立てるといふことは、役人となつて俸給を受けることが不思議とせられたギリシアに於ては、同じく、寧ろより以上に不思議であつたであらう。併しソピステースのソピステースたる所以がそこにあるのでないことは無論である。第二に社會情勢は閑事業的な自然研究に没頭することを許さない。ソピステースは

周知の如く自然哲學者ではなくして進歩的な自由主義者である。彼等の言論の對象は現實の社會であつて、その正體を暴露するにある。例へばトラシユマコスに依れば正義とは強者の利益に異ならないのであり、又『各政府は自分の利益のために法律をつくるので民衆政體は民衆的な法律を、專制政體は專制的な法律をつくるので、そして他の者も亦然りである。そして立法すると彼等は彼等に有益なものを被治者に對して正義であると云ひ出すのである。そしてこれを蹂躪する者をば法律に悖る不正義な者として懲罰するのである』¹⁶。又リユクプローンに依れば『貴族とは全く空なものである。彼等の長所は不明瞭で、彼等の威嚴はたゞ尊號にある丈なのだ』¹⁷と云ふことになり、又アルキダマスに依ると、『神は總ての人を自由にし自然は何人をも奴隸にはしなかつた』¹⁸のである。それ故『哲學とは法律や慣習を攻撃する武器だ』¹⁹といふことになるのである。かくて彼等に依ればノモスは反自然なものであり、本當には人間に差別がないと云ふのである。蓋し何れも暴君、貴族、煽動政治家の治下に呻ける時代相を反映するものであつて、又真相を穿つたものと云へよう。第三に有閑階級として知識のために知識を求めてゐたもの達は事實や現實を無視するが故に、自然根據のない現實から遊離したものとなつた。ゼーノーンの如

きはその代表者である。併し時代の變遷は現實が何よりも確かな存在であることを見せつける、と共に今迄のものとはたとへ論は鋭くとも現實のいづこにも根據を持たぬこと、從て何等の役にも立たぬ空論であることを教へる。そのほかに抽象的な甲論乙駁は自然に懷疑主義へ導くものである。從てゴルギアースの如き者の現れるのは當然でなければならぬ。從て又、現實丈が明かである所から感覺を唯一の根據とし、その普遍化に依つて相對主義、主觀主義を主張し普遍的眞理を否定する。そしてこれ等の論が悪用せられ、これと結んで新道徳が唱へられると共に極端なる個人主義となりソプステースの世を毒することは最早蔽へぬものとなるのである。併しこの様な末流のためにソプステース達の進歩的、先覺者の方面は忘れられてはならぬ。第四に、眞理の相對性、主觀性は實際的眞理の標準を技巧に置く様になる。從て實質的なことに依てははなく單なる技巧に依つて人々を納得せしむれば足りる。それ故ソプステースの特色は意識的にせよ、無意識的にせよ、説得にならなければならぬ。從てそのことから辯論術が——それは政治的生活にとつて實用的にし又必要ではあるが——何よりも大切なものとなる。事實に於てではなく辯舌で以て人を説きつけることが價值を持つ。ゴルギアースの云ふ如く辯論術は萬能

となり、その巧みなる者は醫者よりも醫術に、體操の教師よりも體育に詳しいこととなり、従て又勝れてゐることになる。又修辭學の如き技巧の尊ばれたことも同様である。概して云へば、知識階級は以上の如く時代の中に大分變つて來たことを認めねばならぬ。併しソピステース達はどこ迄も一個の知識階級であるに過ぎない。時勢を知り新思想を主張するものゝ自ら立つて政府に迫るものでもなければ、組織的な協力を依つて變革を目的としたものでもない。たゞの自由主義者に外ならぬのである。

これを要するに、この時代は一般民衆たる知識階級たるを問はず又行動に於てたると言論に於てたるとを問はず、大體同族的共同體を失つて階級的な争や黨派的な争の中に個人の獨立を主張したものと云へよう。即ち財に關すると身分に關するとを問はず個人の自由、個人の平等を唱ふことに過ぎなかつたのである。自然は平等であると云ひ大地は總てその子を同じ容貌につくつたといふみな平等を唱へ解放を叫ぶものに外ならぬ。²⁰ペールマンがエウリビデースの語として述べるところに依れば自然法に反してこゝには無實なる高級な神法が要求され、神々は民衆をして道德的な行動をなさしめんがために賢人を發見し、そして社會的秩序を維

持するために無政府に走ることを防ぐ防備たらしめるのである、といふことである。思ふに彼等には自然法のみが守らるべき法であつて道徳法といひ神法といふものは何れもうつろな人爲物に過ぎぬといふのであり、以て無神論を主張するのであらう。時代的な悩みは總てかゝる傾向を生せしめたものであつて、それらの主張は皆一應尤もと思はれる。併しそれ等の根柢をなすものはペールマン21が既に見抜いてゐる様に秩序なくして平面上に並ぶ様な元子論的個人主義である。昔の素朴な状態の共同體としての秩序は何處にも見られない。それ故に「女議會」に見られる様な男女その位置を顛倒する様なものとならざるを得なかつたのである。併しプラットフォームの云ふ様に各人は本來その適不適を異にする。従て平面化した自由平等は抽象的なものであり、結局不自由不平等となるのである。従て彼等の自由平等は新たな共同體の上に止揚されるのでなければならぬ。

二

民衆は一つの勝利を獲得したと云へるであらう。併しそれは暴力に依るものであつて彼等には原理もなければ理論もない。瞬間的、その場限りの位置の顛倒をやるに外ならない。而も民衆的であり、社會的であるとは思はれながらもその底を

割つて見れば、個人主義、利己主義、快樂主義に外ならぬ。知識階級には時代の真相を見ぬく洞察もあり、又理論もある。併しそれはたゞの暴露であり、無力なる理論である。それは時代相を反映し、時代の潮流を觀念化したものであつて、理論上の個人主義、自由、平等主義に外ならない。アリストブアネースの如きも、單なる諷刺、皮肉であるに過ぎない。皮肉と云ひ諷刺と云ふ何れも無力にして眞直ぐ進み得ぬ弱者固有の自己慰安なのである。本物は時代の流を切ることになければならぬ。否定に依つて導くものでなければならぬ。こゝにソークラテース及びプラトーンの出現した意味があると思はれる。

ソークラテースは自分自らは貧民階級の生れでありながら民衆の傾向に與するものではない。又ソブイステースや政治家と思想行動を一にするものでもない。或は又反動的復古主義者に屬するものでもない。彼は他の何物にも同せぬ進歩者である。アリストブアネースの槍玉に揚げられたこともさうした進歩的傾向を物語るものであらう。彼が國法に殉ずる邊は保守黨の如きもそれは個人主義でないことを示すものである。政治を運用する爲政者の當、不當は兎に角として、個人に對する國家、個人の養ひ親なる祖國の威嚴を重んじ、市民たるの義務として國法に従つ

た迄である。又彼は一時政治家ともなつた。而も又それは政治家としてはその所信の實行し難きことを悟らしめられたるに過ぎない。即ちソークラテースは一度抽籤に依つてブリュタネイオンの一人となつたことがある。その時アルギヌーサイの海戦があつた。その時アテナイの民衆は戦勝せるに拘らず、死體を收容しなかつた十人の將校に對して激昂し、違法を敢てして之に有罪を宣告したのである。此時他の參議員達は民衆の方に壓せられて、そのなす所に委せたのであるが、一人ソークラテースは違法の行動を嫌つてこれに反對した。ためにソークラテースは民衆の怒號に依つて危く告發拘引されんとした。これは民衆政治の頃であるが寡頭政治の時も彼は三十執政官のために命を失はんとしたのである。併し政府の崩壞に依つてその難を逃れたのであつた。併し以上の經驗は政治家としては、少くとも共に協力すべきものゝない政治家としては、到底その所信の行ひ難きを教へたのである。それ故彼は政治に携ることをダイモニオンに依つて諫止されてゐるとさえ云つてゐる。従て又アポロギア篇に云ふ如く政治家とその行動を共にすれば生命を失つてアテナイ人のためにも自分のためにも益することが出來ない。それで『國家の不正、不法を合法的に反對し防がんとする者は何人と雖もその生を全うするこ

とが出来ない。寧ろ本當に正義の戰士たらんとするものは、若し彼にして寸時でも生き様と思ふならば公人として、はなく私人として立つべきなのである。』(三二A)かくて彼は政治より遠退いて一市民としてその活動を開始したのである。以上の如くにして彼は既成的なものゝ何れにも従はず、何れの古きものにも與しなかつたのである。併し彼は古きたゞ一つのものに徹頭徹尾準據したと云へるであらう。それは倫理であり道德である。彼の原理としては終始この一つあるのみであつた。これはヘーシオドス以來、屢々人々に繰返されたものであつて彼の創意でも何でもない。併しこれは古ければ古き程、繰返されゝば繰返さるゝ程、その深き眞理性を物語るものである。それ故それは如何にも古きものでありながら、常に新たに、常に固定せず、人間存在の本性より表れ出すべきものである。ところで従來の道德はどうであつたか。道德とは自然法に反して富者の作れるもの、自己防衛的なものと或者の云つた様に、道德といふ美しき装ひをしながら、その實、人を支配する能力などと云ふ様な権力説であり又、美しきものを求める能力であるなどと云ふ様な快樂説に外ならなかつたのである。それは民衆が行動で表したものと同じ利己主義個人主義の片割に過ぎない。それ故ソクラテスは徳とは何か、正義とは何か、を問ひ、彼の

エレンコスに依つて似而非道德を毀たねばならなかつたのである。そして人間の本性の中に新らしく自覺させようとしたのである。倫理道德が時代を救ふ唯一の原理であるか、少くともそれ次いで十分なる原理であるかどうかは疑問でもあらう。併し政治家として、なく一私人として而もその様な時代を背景として働く彼には、その外に道は無かつたであらう。それ故時代を救ふにはどうしても人間の本性を、而も市民としての人間の本性を、自覺せしめるより外はないと考へたのであらう。彼に依ればアテナイ人は自體としての人間を知る前に、又國家は自體としての國家の前にその附屬物に醜醜してゐる。本體としての一番根本的なものに注意せず、附屬物の如きものに骨折つてゐるのである。それ故に彼は自らを軍馬へくつゝけられた虻になぞらへてその使命を自覺し、又私事の一切を投げ打つて實踐的に奔走したのである。併し彼は民衆の容るゝところとならずしてその説に殉せねばならなかつた。もと／＼ソークラテースの目的とするところは各人共に善良なる市民たることにある。アテナイ人として持つべき徳これ即ち彼の意味する徳だつたのである。彼の獅子吼はこの善良なる市民への自覺に外ならない。善良なる市民といふことを忘却して傲慢横暴化した民衆曲りなりに世を決定して行く民衆に對す

る警告に外ならなかつたのである。兎に角ソークラテースの原理が道徳であり而も市民道徳換言すれば社會道徳であることは疑ふことが出来ない。そしてこの同じ考はプラトーンに依つて引き繼がれた。

プラトーンも亦既成的な政治家や保守黨に與するものではない。併しもとゞ彼はその手紙の中に述べ懐せる如く政治家たらんとしたのである。丁度ペロポンネソス戦争の頃であるが彼の親戚であるクリチアースは貴族を率ひて民主黨を排斥してゐた時であつた。プラトーンは彼にもすゝめられ又自分も政治に惹きつけられてゐたのである。併し貴族と民衆黨との争に於て貴族は破れクリチアースは戦死し、同じく伯父のカルミデースもソークラテースの嘗ての屬望を裏切つて悲しき死を遂ぐるに至つた。プラトーンは親戚の者達の悲き最後、ついでまた又となき師ソークラテースの死に依つて悲は愈々深く、政治への心を全然斷つてしまつた。かくて十年餘りを旅に暮すことゝなつたのである。蓋し彼はソークラテースを殺すに至つた民衆の力や、共に協力してやるべき親しきものを失つたゝめに、一個人の力では如何ともし難きことを知つたからである。従つて彼の活動も亦政治家と行動を共にしてゐることは出来ない。彼は總てを傾倒してゐたソークラテースを思

ふことに依つて生きてゐたとも云へよう。ソークラテースの生前のこと又クリチアースやカルミデースから聞いたと思はるゝ、彼自身の知らなかつたソークラテースのことを思ひ出しては初期の對話篇として書き綴り、そしてそこから又彼自身の哲學的活動が生じたものと思はれる。併し彼はソークラテースと心を同じうしながらも、彼と同様街頭に身をさらすことに依つてゐはなかつた。彼は哲學的理論をアカデミーで講義することに於て活動したのである。それ故彼は絶えず實踐に關心しながら結局は理論を以て時代に對してゐたと云はざるを得ないであらう。併し彼の時代に對する原理はソークラテース同様倫理道德であり、そして又それが彼の哲學の主たる内容でもあつた。蓋し道德と全く關係ない様なことを論じても結局は魂の修業の問題と結合して來る様に思へるからである。同時にその魂の問題は、彼の宗教でもあつたのである。併し宗教とは云へど基調をなすものは倫理道德であつて、²²ポリタイア篇十卷に於ける靈魂不滅の證明が道德の上に基いてゐる如く、彼では信仰を信仰としてそれ自身に絶對的な價値を認めるのではない。従つて宗教と云ふも倫理的宗教の如きものであつて道德が優位を占むると思はれるからである。アポロギアで云ふ所謂ソークラテースの人間自體は彼に於ても道德的な魂

の淨化の出來た人を云ふのである。衣食住的なものや快樂的なもの、功利的なものに煩はされない人を云ふのである。彼は快樂や功利に幸福を置かない。如何に金品があつても幸福とはならず、却つて恰も天秤の一方重くして他方輕くなる如く、徳は輕んせられて人を不具にすると彼は云ふ。幸福はたゞ懸つて魂の歡喜にのみある。而も歡喜とは魂の淨化、有徳に外ならないのである。では人をして有徳たらしめ又幸福たらしめ、賢者たらしむるものは何であるか。數學、天文、音樂等々である。併しそれらはそれらを通して魂の秩序、調和への手段となる限りに於てである。魂を淨化するものは本當には哲學なのである。その様な意味を持つた哲學自身について、別は究明を要する所であるが、兎に角哲學をやれるものは最も幸福となり、現世の如何なるものにも動かされぬ人となるのである。併し當時の社會、國家に關心する彼に於ては、ポリテイア篇に云ふ如く、自分獨りのみ哲學の淨福に耽けることを許さない。所謂悟れるものは同じ市民へ分たねばならないのである。蓋し彼の意圖する國家は、『如何にして國家に於ける一階級を特に幸福にしようかと苦心してゐるのではなく、國家全體を幸福にしようかと努力してゐるのだ』（五一九E）からである。

以上に於て我々は、ソークラテース及びプラトーンの社會國家に對する指導原理

を知り得たと思ふが、更に我々は前節との關係上知識階級との相違を明かにして置かう。第一に、ソブイステース達の特色として擧げたものは彼等が學問の教授に依つて謝金を要求したことであつた。所がソークラテース、プラトーンは謝金を要求しない。ソークラテースはアポロギアの中に、自分が一身一家のことを顧ずして奔走したのはアテナイ人をして徳へ覺醒せしめる爲であつて、利益や謝金のために非ざるを言明し、且つその證據として自分の貧乏を擧げてゐる。併しソブイステース達が謝金を求めたといふことは時代との關係から云つて別に怪しむに足らないのではないか。と共に寧ろソークラテースの如きが問題となるのではないか。一體ソークラテースはその生活の資を何處に仰いだのであるか、彼は孔子の如く仕官もしなければ釋迦の如く鉢托をしたのでもない。又プラトーンがそのアカデミーで授業料を取つたといふことは聞かないが、たとひ取らぬとしても、アカデミーがスコレーを生命として成立つ以上有閑的な餘裕者階級相手のものであることは思ふに難くない。従て謝金を取つた取らぬはソブイステースとの根本的な相違をなすものではない。寧ろソブイステースの非難せらるゝ所以はタクテイークが過ぎて虚を眞とした所にあるのである。又ソークラテース、プラトーンの中心問題もソブイ

ステース同様自然ではなくして人事であり、後者達と同様保守主義者ではなくて進歩者だつたのである。併し後者は言論の自由に於て社會國家を分析し現實を暴露しても何等建設的でない。然るにソークラテースはどこ迄も行爲の人で、事實の上でなし遂げようとする。既成的なものを否定するのも新らしきものを建設する爲なのである。プラトーンも亦同様で彼はポリテア篇第九卷の終に、『我々は建設せんとせる國家に於て、即ち地上の何處にもあらぬ理論の中の國家に於てを語つたのである。併しその模範は天上にあるだらう。見ようとする者には、そして自らを律せんと欲する者にとつては。併しそれが何處にあらうと又あるであらうと變りはない。たゞ問題は實踐にある。他にあるのではない』²³と云ふ。その實踐シラクサ行であつたことは彼の手紙が語る通りである。次に又ソブイステースの如く疑つても、彼等の如く疑ふために疑ふ様な怠惰な疑ひでは決してないのである。ソークラテースの疑ひ且つ否定するのは、美しき装ひの下に色々なものが隠れてゐるからであつて、その様な非本來的な、似て非なるものを破壊するのであり、そしてそれは同時に本來的な真理そのものに歸らんためだつたのである。従て彼の吟味を以て懷疑といふならば真理探究に伴ふ當然の懷疑なのである。プラトーンに於ても一切

のドクサを去つてエピステイマーへの發足であることは周知の如くである。次に又ソピステイス達は現實を重んずることからして感覺を唯一の根據とし、更に普遍化に依つて主觀主義、相對主義に陥つたのであつた。併しこれらの考は、各人の見、各人の考を悉く眞理となすが故に、眞僞の區別を全く消滅せしめ、賢愚の差別を否定することになる。従て一切の教授も指導も師事も更には支配、被支配の意味をも否定することとなり、現實から出發しながら最も非現實な結論とならねばならぬ。かくて彼等の最賢人プロータゴラスも『智慧に於て蛙子にも及ばぬ』²⁴ものとなるのである。彼等のその様な考は個人主義の反映の外何物でもない。従て社會國家の指導を念とせるソクラテイス、プラトーンの考又態度は、こゝに自ら明かであらう。最後にソピステイスに於て尊ばれるものは技巧であるがソクラテイス、プラトーンに於ては實質である。辯論術や説得ではなしに眞理そのものが尊ばれる。ソクラテイスはアポロギアの冒頭に、自分の語ることの雄辯ではなくして眞理であることを何よりも先に斷つてゐる。彼には何の腹心もなく、眞理のためには從來の考を心よく放棄する丈の覺悟が出來てゐる。それ故又彼は脱獄をすゝめるクリトーンに『善き友よ、一緒に考へて見ようではないか、そして若し私の云ふことに對し

て何か反對があるならば反對し給へ、さうすれば私は君に従はふだらう。だが若しさうでなければ……幾度も同じことを云ふのをやめて呉れ給へ。」と云ふのである。又『眞理が大切なので、ソークラテースは物の數でもない』²⁶とか『眞理に抗することは出来ない、愛するアガトーンよ、ソークラテースに抗することは容易なのだから』²⁷とかは皆眞理の威嚴を語るものであつて、彼は眞理の前には如何な權力權威をも受けつけず、それらを子供だましの様なものと云ふ。併し眞理の前には身を羽毛の如く軽しとなしたのである。プラトーンに於てもドグマがあつてそれを技巧で築き上げるのではない。其故彼に於ては結論よりも方法が尊ばれる位である。ペイティンやドクサは彼の最も嫌ふところであつて、彼は常に反省をする、一つを立てゝは更に新らしく出發し結論の豫測を許さない。何故かといふその理由や論據の呈示は彼の根本的な態度であつて、それ等なしに事に當るとか、場當りに事をやるといふことは彼の方法ではない。そしてこのことは他人に對しては論彼となり吟味となるのである。彼に於ては論據なきドクサの如きものは、最も善きものと雖も盲人の手探りによるまぐれ當りに過ぎない。その様なものは價値がない。その證據を我々はポリテイア篇第十卷²⁸のエール物語に見ることが出来る。それに依る

と地界又は天界の長途の旅を経て來た者達が、今や新しい生活へ移るために、生活の種々なる見本を前にして撰擇をやるのである。ところが天界を経て來た者即ち前世に於て立派な秩序ある國家に住んでゐた者でありながら、徳を哲學から得たのでなく、單なる習慣から獲得した者は、徳の尊い所以を知らない爲に、今度は暴君の生活を撰ぶのである。即ち無知と貪欲のためにやがて地界に墮すべき生活を選ぶのである。而も後になつてその惡しき生活であることが分れば、自分の自由に依つて撰擇しながら、偶然やダイモーンのためであると託ち『ダイモーンが君達を選ぶのではなくて君達がダイモーンを撰擇するのである』と云つたアナンケーの娘ラケシスの言葉を忘れてしまふのである。蓋し彼等は前世に於ては習慣から徳に従つた丈けなので哲學に依つてゝはないから、即ち彼等は偶然に結果は正しかつたが *aus Pflicht* の自覺からやつたのではないからである。然るに哲學せる者は間違ふことなきが故に何れの世に於ても幸福であると云つてゐる。何故であるかその理由、根據の把握がなければ徳も本當の徳ではなく幸福も本當の幸福ではない。而してこのロゴスに従ふことが彼の自由でもあり又同時にアナンケーなのである。こゝに於て我々はプラトーンに於ける道徳と哲學との不可分離なることを一層よく見得

ると思ふ。

これを要するにソークラテースもプラトーンも當時の政治家やその他一切の者と言行を一にしなかつた。蓋し時勢は色々な形に現れても歸する所は元子論的な考に基く個人主義だつたからである。個人は舊套を脱して目醒めたものゝ結局は無統一にして無政府、從て幸福を主張して幸福を得ざるところに歸したのである。それ故新たな活動はかゝる元子論的なものを全體に統一すること、而も單なる機械論的な元子の集合として、はななく秩序あり統一のある共同體として自覺せしめる以外には無かつた。ソークラテースの働きかけは、市民而も善良なる市民として即ち國家たる全體に於ける部分として、自覺を促すこと以外にはなかつたのである。而して彼はそれを身を以て行つたのである。プラトーンは其師の如く實行の人ではなかつた。又シラクサでの實行も不成功であり、結局彼は時代の情勢上本來希望してゐた政治家たることが出来ないで第二次的な、云はゞ副業的、閑事業的な理論を事とせねばならなかつたけれどもそれ丈又、その師の考や自分の考を明かな姿に於て表すことが出来た。彼に於ては自由と云ひ平等と云ふも元子論的自由平等ではなく男女及び各個人の素質に基く秩序あり統一ある自由平等なのである。ポリ

テイア篇に云ふ如く各人は多くのこと即ち何でもやることは許されない。各人は自分の本性に最も適した一つのことをやればいゝ。それが彼の國家建設の場合の原理なのである。人間の身體に於て頭、上體、下體の三つの部分がそれゝの固有の職分と徳ある如く、國家に於ても三つの階級、智者、軍人、實業家の三者はそれゝの自分の本分をやればいゝので、一つが他に代つて多くの仕事をやる時、常ならぬ事態が生ずると彼は云ふのである。要するに彼の正義とは自分の本分を盡し多くをやらぬ

(τὸ τὰ αὐτοῦ πρίσταναι καὶ μὴ τοῦ ἀλλοτρίου ἐκκαταστήναι) ³¹といふことである。國家の最高目的である各人全體の幸福、平和は、彼の身體に例を取つた有機的組織の調和統一にのみ得られるのである。國家たる全體に於てのみ個人は存するので、個人が個人として存在するのではない。個人が全體を自覺しない時、義務は無視せられ、人は放縱と無節制に陥る。それ故プラトーンにとつて最も大切なことはこの全體のベトーンンであつた。そのために個人が幾分影うすくなつてゐはしないか、そしてそれが有機體を模範としたことの必然なる歸結でないかどうか、又彼の指導原理が社會の指導原理として十分であるかどうかといふことはプラトーンの國家の詳論と共に論せらるべきものであらう。

以上に於て我々はソークラテース及びプラトーンの原理及び態度をも明かにしたと思ふから、次には暫く國家社會との關聯を離れて兩人の相違、そしてそれが何を歸結したかを見て見ようと思ふ。(未完)

1. G. C. Field, *Plato and his contemporaries* p. 78.
2. A Companion to *greek studies* p. 432.
3. ソチアー希臘天才の諸相(日本譯)一九九頁
4. *Plutarch II Solon*. S. 76. (Tanzenscheldische Bibliothek)
5. *ibid.* S. 80.
6. *ibid.* S. 89.
7. *ibid.* S. 89.
8. *ibid.* S. 78. 又 *Platon Gorgias* 315 B.
9. アテナイ人の國家(日本譯)三八頁、五五頁
10. *Plutarch I. Perikles*. S. 10.
11. *ibid.* S. 13.
12. *ibid.* S. 13.
13. *ibid.* S. 13.
14. Pöhlmann, *Geschichte der sozialen Frage und des Sozialismus in der antiken Welt*. S. 315, S. 318.
15. *Diogenes Laertius*. IX.
16. *Platon, Politia*. 338 E.
17. *Nestle, Vorsokratiker*. S. 209.

- 18, 19. *ibid.* S. 210.
 20. Pohlenmann, *ibid.* S. 287.
 21. *ibid.* S. 420.
 22. Platon, *Politeia* 610 D.
 23. *ibid.* 592 B.
 24. Platon, *Theaitetos* 161 D.
 25. Platon, *Kriton* 48 E.
 26. Platon, *Phaidon* 91 C.
 27. Platon, *Symposition* 201 C.
 28. Platon *Politeia* 219 C.
 29. *ibid.* 617 E.
 30. プラトーンの理想國では男女共に國家の守護者たり得るのであるが、それは男女の本性を研究した上でのことであつて單なる無差別に基くのではない。併しアリストブアネースの「女議會」はプラトーンのポリテイヤ篇が出てから書かれたのであるからと云ふ疑問もある様であるが、直接該書を読む機會なかりしたため明かにし得なかつた。
 31. *Politeia* 433 A.